

研究発表会 発表要旨

守覚法親王の述懐―『北院御室御集』第一系統本特有歌の背景―

金子英和

仁和寺六世御室、守覚法親王の家集である『北院御室御集』の諸本は、神宮文庫本に代表される一四五首の第一系統本と、冷泉家時雨亭文庫本に代表される一七八首本の第二系統本の、二つに大別される。それぞれに特有歌を持ち、それが各系統の個性を作っている。

発表者は、先に、天王寺宮哀傷歌（第一系統一三五番歌、第二系統一六八番歌）が、異母弟である寺門派の僧、定恵法親王の死に対するものであることを考証し、第一系統本は建久八年以降『御室五十首』成立以前に成立したこと、第二系統本は、第一系統本の一部を除棄し、『御室五十首』『正治初度百首』の作を選録した自撰家集であることを論じた（『北院御室御集』の成立時期―天王寺宮をめぐって―）『中世文学研究』六四、二〇一九年六月）。本発表では第一系統本特有歌のひとつである、一二番歌の背景を探る。

なにとなくよの中すさまじくおぼゆるころ、南面の梅の

さきそめてさかぬかたもあるをみて

梅のはなさきおくれたる枝見ればわが身のみやは春によそなる 一一一

一見、ここには守覚の述懐が表出されている。「春によそなる」の措辞は、官位停滞を嘆く場合に多く用いられ、「さきおくれたる枝」は、同根の梅枝に開花の遅速があることを述べ、連枝兄弟に超越されることを暗示していると読解できる。守覚とその異母弟の経歴を比較してみると、守覚に一身阿闍梨宣下がなされたのが仁安三年三月二十七日（『仁和寺御伝』）であったのに対し、第一系統本成立年次確定の鍵となった人物、定恵への同宣下は仁安二年十二月二十五日（『寺門高僧記』）と、弟が兄に先行したことが確認できる。さらにこの間は、梅花が咲く時節を含む。すなわち当該述懐歌は、弟定恵の一身阿闍梨宣下を契機に詠まれた歌であり、それはおそらく仁安三年春、梅花の時期であったと推定できるのである。

右の考証を踏まえたいうえで、当該歌の持つ意義について論じたい。

勸化本『勸導簿照』の典拠と近代受容―「子育て幽霊譚」を中心に―

岩間智昭

本発表は、浄土真宗の勸化本『勸導簿照』（菅原智洞作・明和三年（安永二年刊））所収の譬喩因縁譚のうち、いわゆる「子育て幽霊譚」に属する説話に注目する。その典拠の考察に加え、調査の過程で発見した、本書の近代受容の一例を報告するものである。

本書の作者菅原智洞は、近世中期に活躍した浄土真宗本願寺派の僧侶で、説教の名人大家として多くの崇敬者を集めた。その著書（勸化本）は、現在二二点を確認することができる

〔拙稿「菅原智洞著作目録稿」(『國文學論叢』六五輯、二〇二〇年二月)。その中でも本書は、巻冊数及び諸版の多さなどから、智洞の代表作と見なすことができようかと考える(拙稿「菅原智洞作『勸導簿照』諸本稿」(『古典文藝論叢』一二号、二〇二〇年三月)〕。

さて、本書所収の「子育て幽霊譚」について、その出典付には「四」と記されている。これは、先行する勸化本『分略四恩論』(月感作・宝永三年刊)の書名を略記したものかと考えられる。しかし、『分略四恩論』所収の説話とは、内容が大きく異なっている。むしろその内容は、真言宗の勸化本『真言礦石集』(蓮体作・元禄六年刊)所収の「子育て幽霊譚」に近い。本発表では、智洞が譬喩因縁譚を創作する際に、余宗の勸化本(あるいはそこから発生した巷間説話)を利用した可能性を指摘した上で、本文をどのように増補・改変し、真宗化するに至ったかを論ずる。

また、上記の譬喩因縁譚の典拠を調査する過程で、近代における本書受容の一例が明らかとなった。本発表では、目録や本文の比較などを通し、本書が浄土宗の勸化本『説教換骨集』(神谷大周作・明治二〇年刊)の典拠となったことを述べる。さらに、浄土真宗の勸化本が、どのように浄土宗の勸化本へと変容したのかについても報告する。